

愛川町立菅原小学校

研究テーマ：思いをカタチに ～考えよう・伝えよう・深め合おう～

1 実践の目的

本校では、自分の思いや考えをもっていても、それを言葉で整理し、相手や目的に応じて伝えることに難しさを感じる児童の姿が見られる。特に、語彙の不足や文章構成の見通しの弱さにより、伝えたい内容が曖昧になったり、説明が断片的になったりする傾向がある。また、友達の考えに触れることで理解が深まる一方、交流が感想のやり取りに留まり、理由や根拠をもとに考えを広げたり深めたりする対話に至らない場面が多いことも課題として共有された。

そこで本校では、国語科を中心に、話す・聞く・書く・読むを個別に捉えるのではなく、思考の形成と表現、交流による更新を往還させる学びを重視し、研究主題を「思いをカタチに ～考えよう・伝えよう・深め合おう～」と設定した。児童が「考える」過程で要点を整理し、「伝える」過程で表現を選び、「深め合う」過程で他者の考えを根拠に再構成する姿を目指し、学年の実態に応じた手立てを開発・検証することを本実践の目的とした。



2 実践の内容

① 校内研究について

【概要】

研究の推進にあたり、各学年が児童の実態から課題を明確にし、「課題→手立て→成果→次の課題」を共通の整理枠として授業研究を進めた。特に、表現力を「たくさん書ける」「発表できる」といった量や形式に限定せず、相手や目的、場面に応じて言葉や構成を選び、見直し、説明の妥当性を確かめる力として位置付けた。

【各学年の実践】

1年生は、物語教材において、体験的活動を取り入れ、情景を具体的に想像させた上で、感じたことを言葉や絵で表す学習を構成した。体験を手がかりに、登場人物の気持ちや場面の様子を捉え直し、表現へつなげる過程を重視したことで、児童が安心して自分の感じ方を表そうとする姿が見られた。

5年生は、説明的文章の読みをもとに自分の立場を明確にし、根拠をそろえて記述する学習を行った。複数の資料や視点を比較しながら、主張、根拠、事例のつながりを点検し、必要に応じて記述を修正する活動を位置付けたことで、理由を明確にして説明しようとする姿が見られた。



【研究協議の充実】

参観の視点を事前に共有し、授業者が意図した学習過程（整理→表現→交流→再記述）と、実際の児童の学びの姿とを照合しながら研究協議する形式を継続した。協議では、ICT ツール内の付箋等を用い、児童の発話・記述・交流の場面をもとにして「よかった点」「改善点」を可視化した上で、①教師の支援（教材提示、問い直し、観点の示し方、時間配分等）、②児童の学び（思考の形成、表現の工夫、根拠の妥当性、交流による更新等）の二側面から整理した。

全体共有では、「何が児童の表現を支えたか」「どこで思考の更新が起きたか」を軸に論点を収束させ、次時や次単元へつながる改善案（観点の明示、比較対象の設定、問いの精選、振り返り時間の確保等）を具体化した。

②外部講師による研修について

外部講師による研修では、国語科における「表現力」を文章量や発表の上手さとして捉えるのではなく、相手や目的、場面に応じた書き分けと、根拠に基づく説明として捉える視点を学んだ。教師が価値付けるべき児童の姿を、具体的な行動や記述として言語化し、観点を共有した上で、見直しや共有を学習過程に位置付ける重要性を再確認した。併せて、児童のよさについて、根拠をもって認める評価の在り方が、国語への意欲や「伝えることの楽しさ」を支えることを全教員で共有した。



3 実践の成果と課題

① 成果

話す・聞く・書く・読むに限定しない学習過程（整理→表現→交流→再記述）が校内で共有され、学年の実態に応じた重点化が進んだ。児童は友達の表現を参照して語句や構成を見直し、根拠を確かめて書き直す姿が増えた。問い直しや比較の設定により、交流が感想に留まらず、根拠をもとに考えを更新する場面が見られた。ICT が共有と再検討を支え、協働的な学びの質の向上に寄与した。

② 課題

語彙の土台づくりと言語化支援（型提示・例示・段階化）を計画的に整備する必要がある。推敲・比較・検証をする中で、根拠の妥当性確認や引用・出所の扱いを含めた手順を明確にすることが課題である。



4 今後の展開

① 今後の研究の方向性

発達の段階に応じた観点（表現力のものさし）を整理し、指導事項の重点化と評価の一貫性を高めたい。また、個の思考形成と交流、再記述の往還が成立するよう学習過程と時間配分を再検討し、他教科へも繋げていきたい。

② 残された課題

児童の変容を示す記録を収集・整理し、成果の妥当性を補強する。実践を積み重ね次年度以降へ繋げていく体制を整える。